

子どもの防犯意識を高める



「地域安全マップ」作り

子どもが犯罪に巻き込まれる事件の多くは、通学路や公園などにある「危険な場所」で発生しています。

こうした身近な「危険な場所」を子どもが自ら意識することにより、犯罪を防ごうと「地域安全マップ」作りが始まっています。

「地域安全マップ」作りとは、登下校時の児童の安全確保について、児童自ら「危険な場所」や緊急時に避難する「子ども110番の家」などを調べて地図上にまとめることをいいます。

これにより、危険回避能力が養われるとともに、防犯意識が身に付くといわれています。

市内の小学校でも、こうした取り組みに注目して、地域安全マップを作る動きが広がっています。古井小学校では、昨年12月に通学班ごとに担当の先生と児童と一緒に、通学路の死角となりやすい場所や不審者が隠れそうな場所を点検しました。

同校は通学区域が広く、また通学班は約80もあり、調査は大変だったそうです。現在、調査結果の集計作業を行っています。さまざまなことが分かってきました。まず、竹やぶや鉄道の高架下などといった、通学路の途中には死角が多いことが分かりました。また、通学区が広いこともあり、帰宅途中に友達と別れて児童が一人になる道が意外と多かったことに驚いたそうです。

学校では、こうした結果について、もともと通学路は交通量の少ない道路を基に設定されていたからではないかと話しています。調査時に危険

な場所を特定するだけでなく、大人の視線、そして児童の視線から危険と思われる場所を互いに確認できたことも大きな収穫だったと話しています。

今後は、「こうして集めた多くの情報を、学校やPTAばかりでなく、通学区内の自治会や健寿会などの皆さんに提供して、共有することにより、地域全体で児童を見守っていたことができれば」と話しています。

インタビュー



古井小学校6年生
満嶋すももさん(写真右)
三宅祐季さん(同中)
砂山郁見さん(同左)

砂山さん「わたしの通学路には地下道があり、昼間でも薄暗く、道幅も狭いため、自転車や歩行者とすれ違うときに不安です。地下道を一人で行くときは、走って通り抜けます」

三宅さん「わたしの通学路には、木や竹やぶが生い茂っていて、見通しが悪い所が1～2カ所あります。そこを通るときは、怖い気がします」

満嶋さん「わたしの場合は、そんなに危険な所はありませんが、途中に家と家の間の狭い道を通る所があり、そこは、走って帰ります」



薄暗い地下道を、児童は急ぎ足で通り過ぎていきます